

令和 6 年 度 自 己 評 価 表

鳥取県立鳥取盲学校

中長期目標	視覚障がいのある児童生徒が自己の持つ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うとともに、多様な教育ニーズに応じた指導の充実を図る。	今年度の 重点目標	①主体的に学習に取り組む態度の涵養を目指す教育の充実（専門性向上） ②キャリア教育の推進（地域やふるさとに誇りと愛着を持ち、未来を創造する力の育成） ③仲間と信頼関係を深め、協力して生活の質を高め合う児童生徒の育成 ④チームで取り組むセンタ的機能の充実
-------	--	--------------	---

年 度 当 初				評 価 結 果 (9) 月			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
①学習指導の充実 及び専門性の向上	児童のコミュニケーション能力の向上に向けた指導の充実（小中学部）	○児童のコミュニケーション能力の向上に向け、語彙力や表現力の向上の育成を継続的にいき、相手への適切な伝え方の指導を継続して行っている。 ○新入生2名が入学し、複数名の在籍となった。	語彙が増え、自分の思いを伝えたり、自分の考えを表現したりする場面が増える。	○聴覚、触覚、保有する視覚などが十分に活用できる場面を設定する。 ○体験的な活動を十分に取り入れ、具体的な事柄や動きと言葉とが的確に結びつくようにする。 ○国語科を中心として語彙を増やすこと、適切な表現の仕方を指導、支援する。	・実物や音声を用いる等、事柄や言葉とイメージが繋がるよう指導、支援の工夫に努めた。 ・伝えたいことに合った表現や言葉を考えて文章にまとめたり、自分の思いを相手に伝えたりする場面が増えてきた。	B	・引き続き、児童生徒との信頼関係を築き、安心して学習や生活のできる環境を整える。 ・実感をとまなう体験的活動を意識して取り入れ、児童生徒の概念形成を促す。
	自ら学習課題や探究テーマを設定追究し、その成果を発表できるような学習指導の充実（高等部普通科）	○自らの進路実現に向けて学習に向き合おうとしている。 ○授業や各種行事を通じて学習成果発表の場は設定されている。 ○社会でも必要なコミュニケーション力を一層育成する必要がある。	自ら課題（テーマ）を設定して探究し、学んだ学習成果を授業、行事などで工夫して表現（発表）する。	○各種行事で探究するテーマを設定し、発表・表現する機会を設ける。 ○各授業担当者が、年間の中で学習の成果が表現できるような実践を行う。	これまでの各種行事においては、自らの学びの成果を伝えることはできた。その他の授業の場面においては、今後の学習の進捗に応じて成果を計りたい。課題（テーマ）の設定や学習の深め方には改善の余地がある。	C	引き続き各種行事においては学びの成果を伝える場を設定する。また個々の状況に応じた課題設定の仕方を提示し、その成果のまとめ方や表現の仕方を指導する。スモールステップの課題設定も1つの方策。
	生徒の進路実現につなげるための資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントに基づいた指導の充実（保健医療科・専攻科医療科）	生徒は、本年度入学生であり、進路希望をより具体化していくことや希望する進路の実現に向けて多くの活動に取り組む必要がある。	○理療の知識・技術を活かした就労生活、自立した社会生活ができる力が向上する。 ○個々の進路目標の具体化をめざす。	キャリア教育を柱としたカリキュラムマネジメントに基づく学習や様々な実習活動、治療院見学等を実施することで指導の充実を図る。	進路懇談や治療院見学を通して理療の資格を生かした様々な働き方や理療の魅力に触れることができた。	B	様々な実習行事に向けて多科目で連携し、探究的活動にも取り組むことで、目標の明確化、意欲の向上をはかる。
	各部科・分掌と連携を図り、円滑な日程調整と連絡、適正な授業時数の取扱（教務部）	教科によって、標準時数を下回ることがある。	全ての教科で授業時数を確保し、標準時数以上で実施する。	○授業振替、曜日振替を行い、過不足がないようにする。 ○時数集計表を活用し、授業時数を提示して、調整を行う。	1学期末の時点で、ほとんどの教科で標準時数を実施できた。	B	2学期も曜日振替を実施したり、現場実習等の授業振替を行ったりする。時数集計表を見ながら、授業時数の過不足を調整していく。

様式 3

	つきたい児童生徒の資質・能力を明確にし、カリキュラム・マネジメントに基づいた授業づくりと実践の共有や評価の検討（教育研究部）	昨年度、各教科学習の年間計画が一覧となった単元配当表を基に、教科の担当者間で連携し、各グループごとに児童生徒の主体的な学びを深める実践に取り組んだ。カリキュラム・マネジメントを理解し実践に取り組んでいるが、成果を感じるまでには至っていない。	つきたい児童生徒の資質・能力を明確にし、カリキュラム・マネジメントに基づいた授業の実践に取り組み、評価できる。	○校内研修で、カリキュラム・マネジメントについて理論の確認や昨年度の実践例を紹介する。 ○グループ研で、各児童生徒につきたい資質・能力を検討して共通理解を図る。単元配当表を基に、教科の担当者間で連携し、カリキュラム・マネジメントに基づいた授業を計画する。 ○実践の共有や評価のあり方などについても十分検討する。 ○成果と課題を評価する上での参考となる具体的な実践例を示す。	・児童生徒の資質・能力について、概ね教職員で検討することができた。 ・カリキュラム・マネジメントに基づいた取組が進まないグループもあった。計画した授業については、2学期以降に実施予定である。 ・授業の評価の検討ができていなかった。	C ・グループ研究会で、計画ワークシートの作成や活用 の共通理解を図る。実践の共有や評価のあり方などについても十分検討する。 ・評価のあり方について、授業公開、研究協議会（11/19）で、指導、助言を頂き、実践に生かしていく。
	発達段階に応じたキャリア教育の充実（支援部）	○小学生から成人まで、発達段階や生活年齢の幅が広く、生活や学習の課題が多岐にわたっている。 ○自己の生き方や進路実現に向けて、体験活動を進めている。	キャリア発達段階を意識した指導、生徒の希望に応じた進路情報の提供、体験学習を行う。	○キャリア発達段階を意識し、家庭と学校が連携することで自立のための基礎的能力を高める。 ○進路実現に向けて体験学習や各種模擬試験等を実施する。 ○生徒と個別に面談を行い、必要な情報を提供する。	・学校での係活動、委員会活動と家庭でのお手伝い等、連携して取り組んだ。 ・生徒の希望に合わせた見学や実習、模擬試験を通して、個々の進路について深く考えることができた。	B ・引き続き学校と家庭が連携し、発達段階に応じた個々の役割について共通理解を図る。 ・実習、模擬試験、進路講演会等進路希望に合わせて学びを深める。
②キャリア教育の推進	社会参加を意識した人との関係づくり、協力して取り組む力の育成（寮務部）	個別の教育支援計画をもとに、舎生一人一人の障がい特性を理解し、社会自立へ向けての指導支援を生活全般・行事等で行っている。舎生同士が一緒に活動する機会が徐々に増え、行事や生活面で他者を意識した言動が増えてきてはいるが、全体としての意識はまだ低い。	舎生一人一人の実態を職員間で共有し、職員が舎生の他者をして意識した働きかけを行う中で、舎生のあいさつや言葉かけ、行動等が増える。	○生活の中で、他者を意識した場面をできるだけ多く設定する。 ○寄宿舎における行事・活動等の企画・運営で、舎生が互いに協力しながら内容を考えてり運営したりする場面と十分な時間を設定する。 ○家庭・学校等との連携を軸とした主体性育成のための指導・支援を行う。 ○盲生と聾生と一緒に活動する場合は、必要に応じて職員が手話通訳などの仲立ちを行う。	あいさつやことばかけ、余暇活動での関わりなど、他者を意識した言動は少しずつ増えてきてはいるが、まだ十分ではない。社会性に課題がある舎生も見られる。	C ・引継ぎやケース会など、情報共有や指導、支援について、しっかりと職員間で話し合っ て進めていく。 ・舎生の実態把握と安心して思いが 出せる環境づくりに 努める。 ・舎生の考えや思いが 把握できるような舎生 の実態に応じた働きかけ の工夫に努める。
③仲間と協力する児童生徒の育成	異年齢集団による児童生徒会活動や行事等を通じた思いやりの精神や企画・調整・発信力などの社会生活の基盤の育成（指導部・イノベーションプロジェクト実行委員会）	○今年度は小1から専攻科の大人までの幅広い年齢層での児童生徒会活動になる。 ○児童生徒はこれまでの活動で仲間と協力しながら主体的に取り組むことで達成感を感じるとともに、実践力も身につけてきている。	各年齢・学年に応じた思いやりや主体的に工夫・協働・課題解決する実践力が育つとともに、活気ある学校づくりやより良い校風につながっている。	○行事等の成功に向けて担当児童生徒の話し合いの時間を確保する。 ○教職員は児童生徒の話し合いが主体的に行えるように見守りつつ最小限の助言を行う等の支援をする。 ○児童生徒教職員は企画運営の振り返りを行い、次の行事の改善につなげる。	・児童生徒交流会では、全校児童生徒が楽しめる企画を一生懸命考え、会の成功に向かって工夫して取り組む姿が見られた。 ・とりもうフェスタに向けた準備では、皆が楽しめるイベント企画の立案に向けて児童生徒へのアンケートを実施し、話し合いを重ねる姿が見られている。	B 今後も様々な行事等の活動において、児童生徒の主体的な活動経験を積み重ねていく。

様式 3

④センター的機能の充実	積極的な情報発信によるセンター的機能の周知と視覚障がい理解啓発、指導支援の充実と推進（支援部）	○県内弱視学級10校とGoogleClassroomを作り、全5回の視覚障がい教育ミニミニ研修会を実施した。 ○8月と12月に弱視学級とのふれあい交流会を実施した。 ○依頼を受けて視覚障がい理解学習への協力、支援グッズ等の展示・紹介を行った。 ○県内19の市町村乳幼児健診担当課へ教育相談チラシの配布を行った。	積極的に情報発信をしてセンター的機能の周知をし、校内の人材を活用した見え方等に応じた支援を進める。	○ホームページやおたより、GoogleClassroom等により情報を発信をする。 ○ミニミニ研修会の反省をもとに、よりニーズにマッチした研修会の実施方法、実施内容を検討する。 ○視覚障がい乳幼児支援の充実のため、外部講師を招いての研修会を夏季休業中に実施する。 ○特に全盲児の発達支援について研修を重ね、支援に生かす。	・夏季休業中に外部講師を招いて視覚障がい研修会を実施。外部から22名の来校があった。 ・視能訓練士との連携事業で、中西部地区の弱視特別支援学級の訪問支援ができた。	B	校内資源とGoogleClassroom等を使って視覚障がいの専門性を生かした研修会を実施、情報提供を行う。
	鳥盲ボランティアとの活動による地域との連携の深化（総務部）	昨年度より鳥盲ボランティアの活動を再開した。ボランティアの人数は多くはないものの、年間の予定に沿って活動できている。さらなる地域の方との連携を深めたい。	鳥盲ボランティアと児童生徒とのふれあいを増やし、地域との連携を深める。	○学校の要望と地域の方の願いを聞きながら新たな鳥盲ボランティア会員を募集する。（現ボランティアの方からの紹介含む。） ○お互いに有意義な活動となるよう活動内容を計画して実施する。	・昨年度登録の鳥盲ボランティアの方々に知り合いなどへ広げていただき、1人新規登録していただいた。 ・プール掃除、作業学習支援、環境美化等積極的に関わる場面が増えている。	C	・ボランティア登録を増やすことができるように継続して啓発活動に取り組む。 ・児童生徒のニーズを収集し、ボランティアの方へ情報提供し、ふれあう場面を増やす。

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し
 [100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]